

青門の柳

白居易

青青一樹心
傷まじむるの
色

曾て幾人
離恨の中に入

都門近くして
多く別送るが
為

長條折り
尽くして
春風を減ず

【作者】白 居易(七七二〜八四六年)、中唐の詩人。字は楽天。号は醉吟先生・香山居士。弟に白行簡がいる。鄭州新鄭県(現河南省新鄭市)に生まれた。子どもの頃から頭脳明晰であつたらしく、五〜六歳で詩を作ることができ、九歳で声律を覚えたという。彼の家系は地方官として役人人生を終わる男子も多く、拔群の名家ではなかつたが、安祿山の乱以後の政治改革により、比較的低い家系の出身者にも機会が開かれており、八〇〇年、二十九歳で科挙の進士科に合格した。三十五歳で藍屋県(ちゆうちつけん、陝西省)の尉になり、その後は翰林学士、左拾遺を歴任する。このころ社会や政治批判を主題とする「新楽府」を多く制作する。八一五年、武元衡暗殺をめぐる越権行為があつたとされ、江州(現江西省九江市)の司馬に左遷される。その後、中央に呼び戻されるが、まもなく自ら地方の官を願い出て、杭州・蘇州の刺史となり業績をあげる。八三八年に刑部侍郎、八三六年に太子少傅となり、最後は八四二年に刑部尚書の官をもつて七十一歳で致仕。七十四歳のとき自らの詩文集『白氏文集』七十五巻を完成させ、翌八四六年、七十五歳で生涯を閉じた。

【語釈】*青門…長安城の門 *離恨…別離の悲しみ *都門…青門の事 *長條…長く垂れ下がっていること

【通釈】青々としている柳の木は、見るからに痛ましい。ここでは今までに幾人の人が、別離の悲しみを味わってきたことであろうか。子の柳は青門の近くにあり多くの人達が別れを惜しむ為に、長く垂れ下がっている枝は殆ど折りつくされて、春の風情をそこなう事がおびたしいのである。